



# 今日からできる 『社会貢献』

文化応援の着眼点

第5回

NTTデータ経営研究所  
村橋 保春

## 多様性、独自性、排他性

地域振興の仕事で各地を訪れる機会が多い。時間に余裕があるときは、郷土資料館や民俗博物館に立ち寄ることを楽しみにしている。そうした施設で必ず展示されているのが祭りで用いる山車である。

各地には地域の誇りとする祭りがあり、祭りを楽しみに一年を過ごす人たちも数多くいる。祭りの中心となるのは山車。地域の人たちがお金と労力をかけて自慢の山車をつくり祭りの日まで大切に保管している。山車の呼び方は地域により、祭りにより異なる。曳山、だんじり、屋台、神輿、山鉦など。訪問先の人と親しくなり、祭りの話をするときにはまずこうした呼称を確認し、お酒を伴ってもその呼称を間違わないように注意している。

祭りは習俗や信仰、歴史や風土などを背景として形成されている。同様な地域においても、祭りのあり方は微妙な違いがあり、多

様性、独自性がある。山車を曳くなど祭りそのものに関わるためには、伝えられた約束事をきちんと満たさねばならず、排他的である。

社会貢献の実践のなかで、文化振興は大きな役割を果たす。ただし、文化には成り立ちやあり方、方向性など十分に考慮すべきことがらがある。文化の多様性、独自性、排他性を把握しないで支援すると、新たな課題が生じることがある。まず、この点について十分に認識しておくことが重要である。

## 文化の発信を支える

ではどのような文化振興から始めるとよいか。それは文化に携わり支援を受けたいと考えている人たちが支援することである。

文化に関わるプロセスは大きく分けて「創造」と「発信」とがある。創造のプロセスは内部に収斂することが多く、創造の環境を整備、維持することが支援となる。発信のプロセスは外部に発散することとなり、いかに適切に多くの

人たちに伝達できるかを支援することとなる。支援する側、支援される側双方にとって取り組みやすいのはこのうち発信のプロセスである。

演奏や演舞、美術作品は、場を共有する臨場感、量感や感触といったリアルな肉感、すべての要素を同時に感受する総合的イメージが必要であり、五感、時として第六感にまで働きかけることがある。

情報通信による発信も増えてきているが、こうした発信はとくに支援を受けずとも個人のレベルで発信できる。支援が必要なのは演奏や展示などの空間を用いた発信である。文化応援を発信のプロセスに注目して、発信の空間の支援のあり方を考えたい。

## 街が音楽であふれる

祭りは地域の歴史や風土を反映して、多様で、独自性に富み、排他的でもあると述べた。しかし高度成長期に発展したベッドタウンやニュータウンは、誇りとする祭



高槻ジャズストリートHPより

りを生み出す時間的蓄積がない。ニュータウンでなくオールドタウンだと皮肉られるように、世代更新もされず衰退し、歴史や風土を形づくることができないう都市も増えてきている。

閉塞感をより敏感に感じ、自分たちの努力で打ち破っていきたいと考える若者たちが現れてきた。そうした若者は生まれ育った地域に、自分たちで色付けをし、楽しく、暮らしやすい街に変えていこうと動き出している。祭りを組み

上げる要素に乏しい地域では、まずは多くの人たちに出かけてきてもらい、にぎやかさのなかからその地域独自の祭りの萌芽を見出す動きがでてきている。

たとえば、ジャズフェスティバル。地域全体を舞台として、ジャズ一色に染める。広場に舞台を設け、次々にジャズバンドが登場する。喫茶店など、施設内で演奏可能な空間ではしつとりとした曲調を奏でる。プロもアマチュアも腕を競う、想いを伝える。

高槻市は大阪市と京都市の中間地点にあり、両大都市のベッタウンとして急速に成長した。高度成長が始まる1955年には5万人強の人口であった同市は、1990年には35万人を超え、じつに7倍に拡大した。高山右近が城主の高槻城など歴史的要素も数多くあるものの、新規参入者が圧倒的に多く高槻のアイデンティティを形成する暇もなく都市化が進んだ地域である。首都圏、中部圏にもこうした特性を持つ都市は次々と誕生している。

そうした高槻市で「高槻ジャズストリート」が1999年に誕生した。街路や広場、施設を使って無料でジャズを聴くことができ、市民手づくりのイベントである。ゴールデンウィークに開催

し、隣接する同様のベッドタウン都市からも、多くの人たちが楽しみに訪れる。この時期、この地域で欠かせない「祭り」となった。ジャズだけでも宇都宮市、千葉市、徳島市、札幌市、高崎市など多くの都市や地域が「祭り」として発信している。ほかのジャンルの音楽をテーマとした同様の活動も全国各地で起こっている。地域の特性を歴史や風土からでなく、自ら創作する人たちがこうした活動を積極的に進めている。

### お国自慢、自分自慢

文化に基準を設定することは難しい。基準に達していないと発信できないとなると、その基準そのものの検討、判断が重いものとなる。基本は、お国自慢、自分自慢ではないだろうか。せっかかない

モノがあるのだからみんなに自慢したい、もっとほめられたい、注目されたい。だから腕や技を磨く。芸術のおおもとはこんなところにあると思う。

高槻ジャズストリートではアマチュアバンドの応募が多く、プログラムを組み立てるのに苦労するそうである。フラダンスやよさこいなど、全国で行われるイベントには手弁当で押しかけるアマチュアの踊り手が多い。公民館で年一度行われる編みぐるみなどの手づくり作品の出品を、大きなイベントとしてがんばるお年寄りが増えている。

今日からできる文化応援は、芸術性を基軸において大上段に構える文化ではなく、もっと身近なお国自慢、自分自慢としての発信をお手伝いすることだと考える。演奏活動、演舞活動の発表の場として提供や展示会告知のサポートなど、すでにいろいろ活動事例がある。こうした活動がいっそう幅広く、行われることを期待したい。